

Interview

駐日ラテンアメリカ大使 インタビュー

第24回 ポルトガル

シャヴィエル・エステヴェス
駐日ポルトガル大使

急速に改善する ポルトガル経済

— ポルトガル語圏での三角協力を —



ポルトガルのシャヴィエル・エステヴェス駐日大使は、このほどラテンアメリカ協会のインタビューに応じ、英国のEU離脱とEUの今後、ポルトガル語圏との関係、財政問題の現状、日本との貿易投資関係、中国との関係などについて見解を表明した。

エステヴェス大使は1979年外務省入省、NATO代表部書記官、駐モザンビーク大使館書記官、首相補佐官、駐英国大使館次席、駐ブラジル大使館次席、EU政治安全保障委員会ポルトガル代表、駐アンゴラ大使、国連ジュネーブ代表部大使、外務省経済局長、駐モロッコ大使等を歴任後、2015年より駐日大使。

インタビューの一問一答は次のとおり。

— 大使は日本に着任されて約2年半になりますが、日本についてのどのような印象をお持ちですか。これまでの日本滞在で最も印象深い思い出は？

大使 多くの外国人同様、私も日本の社会のすべての層がきわめて礼儀正しいことに感銘を受けています。仕事上の公的な場面のみならず、日常生活においてそれを実感しています。

日本では道に迷うということはまずありません。必ず誰かが助けてくれます。この礼儀正しさのもう一つの側面は親切なおもてなしです。私はこれまで八カ国に住みましたが、この国で受けたような親切を他の国で受けたことはほとんどありません。もう一つの日本の特徴は些細なことでも常に完璧さ、厳密さおよび真面目さを求める姿勢です。日本人の美に対する姿勢においてもそれは顕著です。すなわち、自制と簡素さを通して優雅さと均整を追及しています。その哲学的、宗教的な背景を十分理解しているわけではありません

が、それは実に魅力的です。

東京を探索していると、例えば新宿には超近代的な慌ただしい生活がある一方、古い界限に入ると狭い道路や小さなレストランがあり、村のような雰囲気です。私はそのコントラストを大いに楽しんでます。またたびたび京都を訪れ、多くの人と同じく私も京都を発見しようと努めていますが、その都度なにか新しいものを見つけます。さらに九州の美しさにはいつも心を打たれます。しかし私にとって最も強烈な印象は終戦70周年記念の広島・長崎訪問です。両市を訪れるとももの見方が変わります。

— ポルトガル経済は貿易・投資ともにEUとの結びつきがきわめて強いようです（輸出入の約7割、対ポルトガル直接投資の約8割がEU域内国）が、英国のEU離脱がポルトガルに及ぼす影響（プラス面、マイナス面）は如何でしょうか。

大使 英・EU 間交渉の最終結果を見ないとなんとも言えませんが、英国の EU 離脱は非常に残念です。われわれの同盟関係は 14 世紀以来のもので、理論的にはそれは現在も続いています。英国はきわめて重要な経済・貿易のパートナーであり、またポルトガル国内にはかなりの規模の英国人社会が存在します。さらに最近 20 年来の現象ですが、英国で仕事をするポルトガル人社会も大きくなっています。EU を離れても英国はこれまでと同様欧州の極めて重要な一部であり続けるでしょう。われわれは今後も緊密な関係が維持されることを願っています。英国と EU は互いを必要としており、また世界も結束した強力な欧州を必要としています。

— 欧州および米国でこれまでのグローバリズムに対抗する形でナショナリズムの動きが高まっていますが、EU の今後についてどう見ておられますか。

大使 われわれはグローバル化から逃れることも逆行することもできません。人類は“部分的”グローバル化から“地球全体の”グローバル化に進んでおり、今や地球上に全く孤立した場所はないということを歴史が証明しています。もっとも、“地球全体の”グローバル化とその変化の急激さをいかに調和させるかという問題はあります。われわれの社会・経済・政治システムがこの目まぐるしい変化への適応に困難をきたし、各国の社会組織を損ねる面がありました。グローバリズムの勢いが強く、それが一体どこで決まるのかを見極めるのが難しくなっており、したがって民主主義をいかに機能させるべきかを判断するのが困難になっています。それが最近のポピュリズムやナショナリズムの波、つまり不確実性に対する衝動的で無組織な反応の背景にあるのではないのでしょうか。我々の課題はかかる不確実性を減らすこと、そして民主主義を再興することでしょう。EU は紛争が契機となり紛争を予防するために生まれました。またそれはキリスト教民主主義および社会民主主義運動を引き継ぐ優れた社会モデルの創設によって正当化されています。われわれは社会的包摂と民主主義の意義をより開かれたグローバルな世界において復活させなければなりません。それが今後数年間における EU の課題であり、EU のみがこの課題に挑戦できるでしょう。バラバラに分断され弱体化した欧州でこれらの問題に対処できると考えるのは危険な幻想です。現在は過渡期にありますが、私は EU がこの挑戦に対処する用意はできていると信じています。

— ポルトガルは市場拡大のため、EU のみならずブラジル、アンゴラ等のポルトガル語圏諸国共同体 (CPLP)、北米・中南米、アジア等との経済交流拡大が必要かと思われますが、そのための何らかの対策はとっておられますか。特にブラジルを始めとする中南米との関係はいかがですか。

大使 ポルトガルは近年経済・貿易関係の多角化に努めていますが、未だ欧州市場に偏っているきらいはあるかも知れません。ポルトガルに近い北西アフリカを含む大西洋戦略、特にアフリカ大陸のポルトガル語を母国語とする国々との協力関係の強化に努めてきました。大西洋の対岸では米国が貿易および投資の最大のパートナーの一つです。

メキシコも重要な貿易相手国になりました。アルゼンチン、チリ、ペルーのような国々との関係強化も望んでいます。ベネズエラとの関係も深く、この 10 年来コロンビアの重要性も増しています。

しかしもちろんブラジルは特別な位置にあります。両国間の歴史的、文化的および経済的関係、そして特に血縁関係には深いものがあります。人的交流は一貫して増えています。昔からのポルトガル人のブラジル移住はもちろんブラジル人のポルトガル移住も増えています。リスボンからブラジルの主要州の首都への直行便が毎日運航されています。従って人的ネットワークは広がっており、また経済貿易関係も拡大しています。両国は特別な兄弟関係にあり、国境の意識はあまりありません。

— ポルトガルは本年の国祭日 (6 月 10 日) をブラジルで祝われると聞きますが。

大使 前述のとおり、ポルトガルの歴史は常に世界の他の地域との繋がりのおかげで展開してきました。その歴史遺産の一つが三大陸にあるポルトガル語を母語とする国々で、お陰でポルトガル語は世界でも最も広く通用する言語の一つになっています。もう一つの遺産は欧州、アメリカ、アフリカ等世界中に四散しているポルトガル社会の存在です。この絆を尊び、継続するためポルトガル政府は国祭日を本国のみならず世界中に存在するポルトガル社会においても実施することにし、今年ブラジルということになっています。

— ギリシャの財政危機を契機に、ポルトガルは大幅な財政赤字国として注視されるようになりましたが、その後ポルトガル政府は欧州委員会、欧州中央銀行、国

際通貨基金（IMF）と財政健全化プログラム（トロイカ合意）に合意しました。財政問題の現状は如何でしょうか。また、コスタ首相率いる現社会党政権（少数与党）は、前連立政権がトロイカ支援プロセスの中で推進してきた構造改革や年金削減、増税等の緊縮措置の一部撤廃等を進めており、今後も財政規律が維持されるのか、また EU や NATO 等に対する基本方針が異なる左派各党との協力関係がいつまで続くのか注目されていますが、この点については如何でしょうか。

大使 2008年の世界金融危機を受け、ポルトガルは2011年以降困難かつ厳しい「調整プロセス」に入りました。しかし最近の経済指標は極めて良好です。欧州委員会（EC）はポルトガルを“過剰赤字手続き”の対象国から外すよう勧告しています。ポルトガルの昨年の財政赤字はGDPの2%、今年は1.5%を切ると見られ、EUの上限3%ルールを十分クリアしています。成長率も上向いており（本年の第1四半期は2.8%）、失業率も低下（現在約9%）しています。

また経常収支および資本収支も均衡しており、民間および銀行部門の債務並びに“不良債権”も減っています。国内投資も輸出も伸びています。全体として峠を越え、再び安定成長路線に戻っています。もちろん今後も厳しい政策の継続とともに、特に欧州および世界におけるダイナミックな経済環境も必要でしょう。ポルトガル政府は経済の構造改革を推進するとの立場を明確にしています。政府は責任ある財政政策のもと、経済の近代化と成長を同時に進めようとしています。

現政権は少数与党ではありますが、これまでに経済分野で得られた成果が示しているように、議会で必要なコンセンサスを得ることは大いに可能です。

一 日・ポルトガル間の貿易・投資関係は如何ですか。日本側に対する要望は何ですか。

大使 日本との二国間貿易は未だその可能性を十分に生かしていないと言えるでしょう。

両国間貿易を増大させるチャンスはまだたくさんあると信じます。われわれとしては日本市場の多くの分野でポルトガル企業がプレゼンスを高めるよう奨励してきました。ポルトガル企業側でもこれまで欧州市場に注力し過ぎたことを反省し、日本に目を向けよう、あるいは日本に戻ろうというところが出てきています。

またいくつかの日本企業がポルトガル投資を増やしているのは嬉しいニュースです。特に丸紅のプレゼンスが顕著で、三菱商事も活発です。われわれも日本

企業といっしょになって新たなチャンスを探したいと思っています。現在ポルトガルに投資されている日本企業は、欧州全域はもちろん他のポルトガル語圏の市場にも目を向けておられるでしょう。

日本の観光客も毎年約5%の割合で増えています。昨年ポルトガルを訪れた日本人旅行者は10万人に達し、今年は確実にそれを上回るでしょう。

一 中国からの投資は対GDP比ではポルトガルがEUの中で最も多いと聞きますが、その理由および投資分野は如何でしょうか。

大使 経済貿易関係を多角化するうえで中国が格好の国となっています。中国企業はこの2～3年エネルギー、銀行および保険部門を中心にかなりの投資を行っています。そしてそれは他の部門にも広がりそうです。中国企業はポルトガルの国内市場のみならずポルトガルを足場に、そしてポルトガル企業と提携しつつ他の市場も視野に入れています。ポルトガルはマカオを通じ中国とは数世紀にわたる長い関係があり、現在も友好関係を維持しています。

一 欧州では3年に1度日本学の大規模な学会が開かれ、今年は8月末から9月初めにポルトガルで開かれると聞きます。日本と西洋の最初の出会いはポルトガルであり、日本にとってポルトガルはヨーロッパの中でも最も長い友好の歴史を持つ国ですが、文化の分野での両国間の交流の進展状況は如何ですか。日本に期待することは？

大使 ポルトガルと日本の歴史的関係はよく知られており、我々も日本との関係に特別な親愛の情を抱いています。特に九州との交流はより緊密なものですから、私は九州を訪れる度に暖かくもてなされ感謝します。リスボンでの日本学の学会は今日の世界において二国間交流をいかにしてより活発にするかを検討する絶好の機会となるでしょう。両国社会間の交流は非常に大事であり、さらに緊密にすべきです。両国民の自発的友情はすでに存在します。大学および研究機関間のさらなる協力、学生交換の拡充、ポルトガル語圏との三角協力などにより二国間の絆をより一層深める方途はいろいろとあります。

（インタビュアー ラテンアメリカ協会副会長 伊藤昌輝）



『アンデス文明— 神殿から読み取る権力の世界』

関 雄二編著 臨川書店

2017年3月 473頁 7,900円+税 ISBN978-4-6530-4319-5

わが国のアンデス文明考古学者の60年来の成果の一つに、世界文明の大型祭祀建造物の建設にはその地に余剰生産力があってはじめて可能になるという従前からの説に対して、それを覆す画期的な仮説「神殿更新説」の提示がある。本書はこの「神殿更新説」の流れを継承しながら、依然残された問題点や課題の解明を、編者が中心になって2005年以来行ってきたペルー北部高地のパコバンバ遺跡発掘調査の成果から集大成したもの。

これまでの発掘調査では、考古学や文化人類学の枠の中で行われてきたが、近年は様々な分野の科学者も加わり、横断的な分析・比較が大幅に取り入れられた。権力形成を遺構建築の推移から、神殿の位置付けを自然環境の変化から、また年代測定やDNA等測定技術の進歩、土器や骨角器具、金属器などの製作技術、廃棄物などの検証からその利用や当時の生活、権力構造を洞察し、同じ北部山地のクントウル・ワシ遺跡や海岸・中間地点での調査結果と付き合わせることで、アンデス文明の形成過程を明らかにしようとしている。

〔桜井 敏浩〕



『植民地化の歴史— 征服から独立まで / 十三～二〇世紀』

マルク・フェロー 片桐祐・佐野栄一訳 新評論

2017年3月 634頁 6,500円+税 ISBN978-4-7948-1054-9

植民地化は、欧州以外でもはるか以前からギリシャ・ローマ、中国、アラブ人、トルコ人等が行い、現在もなお過去の帝国主義という支配形態に因る植民地化が、旧ソ連領の民族紛争、シリアの内戦などでの暴力の連鎖に繋がっている。本書は世界のそれぞれの歴史に登場する時点からさまざまな征服・領土分割・敵対、ある民族の性質、その民族が歴史に登場・消滅する経緯を描いている。植民する側の宗主国であるこれまでの欧州中心の視点だけに陥ることなく、欧州以外の諸国の植民地化現象と付き合い、隷属下におかれた様々な民族の側にも目を向け、数百年におよぶ世界の植民地化を比較、検証した大部な歴史解説書。

ラテンアメリカについては、ポルトガル人によるアフリカからインド進出、それに対抗するスペイン人征服者、アメリカ大陸におけるメスティーソ（混血）の増加、黒人奴隷、英印混血、植民地生まれのクレオールによるあらたな人種社会の誕生をたどり、侵略者が先住民に負わせた心的外傷、ラス・カサス神父等による植民される側の擁護、旧世界からの侵略者によってもたらされ虐殺とともに壊滅的な被害をもたらした伝染病、一方で逆に新世界から伝わった梅毒などの「病気の交換」、征服による儀礼時の飲酒の習慣化や社会共同・共有システム、伝統の破壊、それに抵抗する先住民の叛乱、欧州から入植した者たちの既得権擁護のための抵抗とその子孫（クレオール）による独立運動などを、世界史の中で俯瞰している。そして第二次世界大戦後にアジア、アフリカ、そしてラテンアメリカで起きた独立運動、革命（ペルーでの「センデーロ・ルミノソ」の運動にも言及している）の闘いにより、解放・脱植民地化が世界各地でどのように進展したかを考察している。

〔桜井 敏浩〕